

佐東の文化

No.33



生花 樽井悦子

平成19年10月15日

佐東の文化

No.
33

特別寄稿
物語の神さま
あさのあつこ



佐東文化協会

目次

巻頭言

生涯学習の推進を願って……………横山 猛……………1

特別寄稿

物語の神さま……………あさの あつこ……………3

少年少女の夏……………岡田 千茶……………5

書に生きる……………阿部 雲魚……………7

所感寸言

出合い……………江見 英雄……………9

蝉の声……………井上 健一……………10

老いのたわ言……………吉政 実夫……………11

随筆随想

「剛」のたわごと……………藤本 伸子……………14

先生ありがとう……………井口 祥子……………15

父……………岩本 全子……………16

可愛い曾孫……………加藤 美雪……………17

台風余感……………江見 英雄……………18

歴史紀行

上福原と下福原村間の地域名は……………加藤 芳英……………21

『英多郡英多郷』福原村だった？……………春名 正昭……………22

出雲街道とその周辺…………………………22

短文芸

詩 『栄光のなでしこ』……………田中 清一……………26

俳句

野火……………山本 登山……………27

産土讃歌……………江見 英雄……………27

強食弱肉……………山下 照夫……………27

飾焚く……………春名 静山……………28

夏……………田中 清一……………28

風光る……………青山 元江……………28

柿若葉……………樽井 清江……………29

老木……………加藤 美雪……………29

百花繚乱……………宿野 淑子……………29

白牡丹……………春名 波留夫……………29

偲びつつ……………真野 雅子……………30

水仙……………井口 祥子……………30

夏至の雨……………高橋 ヤエ子……………30

折々に……………杉本 幸子……………30

優しき能登香の風……………森本 久子……………31

麦の秋……………坂井 はつ子……………31

土動く……………坂部 金治……………31

川柳…………………………32

神感朝夕……………江見 英雄……………32

題字
山本 章

転ぶ	春名山	32
想定外	山下照夫	33
他人	山本千恵	33
合鴨田	山平順三	33
風	山田智子	33
道	山本昌子	34
祈り	原本幸子	34
チャイナ服	山本登	34
短歌		
直会の酒	三木泰葉	35
命	黒石登代	35
古稀	坂井はつ子	36
鶏インフルエンザ	阿部すみゑ	36
ヌートリヤ	加藤幸子	36
受難	山下照夫	36
あさのさんあつこさん	江見英雄	37
桜	春名静山	37
夏	角利津	37
大和に最後まで戦ったのは温羅	加藤芳英	37
命をも干す	横山すみ子	38
春の風	横山昌子	38
広きが中に	横山美恵子	38
をりをりに	加百由起子	38

八十路坂	小林増代	39
冬陽	宿野和穂	39
深緑	原田順子	39
夫と歩みて	有元理嘉子	39
父恋ふ	新田千晶	40
動かざるまま	新免三代	40
春の足音	梅本信恵	40
名月	井上智	41
子供歌舞伎	名部みどり	41
鴉	藤川亜也	41
折折に	清田三智子	41
南の海に	原幸子	42
追憶	青山元江	42
水無月	内藤慶子	42
曾孫	光井房子	42
ふる里	荒尾登志ゑ	43
旅	名部和子	43
刻こくと	池田保子	43
わが里	安西保苑	43
紫陽花	横林富砂子	44
能登香温泉	藤本伸子	44
明るい人生に	鳥形節子	44
子供の声	森本久子	44

笹百合	山下三代子	45
微笑み	井口秀子	45
折にふれ	杉本幸子	45
幼児	新井和代	46
秋はそこから	福島美智子	46
孫	船曳文子	46
若葉	角南三津ゑ	46
明日を祈りて	新免初子	47
青い空見る	北村和子	47
梅雨	加藤保子	47
老の一齣	黒石貞子	47
うららの光	長澤和枝	48
をりをりに	中川富美枝	48
男の孫	森本かよ子	48
今宵暮れゆく	末宗千歳	48
里の命	江見眞智子	49
テレビに遊ぶ	徳野富美子	49
きつと間にあふ	日下智加枝	49
生きる	入矢敏江	49
揖保川の源流	浜田くに子	50
ふるさと	三浦智江子	50
能登香山	関内惇	50

作東文化協会グループ紹介	52
作東文化協会会則	53
平成18年度 作東文化協会事業報告	55
平成18年度 作東文化協会決算報告	56
平成19年度 作東文化協会会員・役員名簿	57
編集後記	68

表紙説明

題「月下美人」日本画
 今年も八月にやっと月下美人が咲きました。夜に咲き、朝にはしぼんでしまい、一夜かぎりの香りの高い華麗な花です。
 三年かけて作品作りをしました。
 思い出の多い逸品です。

井上美智江

〔巻頭言〕生涯学習の推進を願って

会長 横山 猛

今年、全国生涯学習フェスティバルが岡山県において開催されます。もちろん、美作市においてもこれを受けて、九月九日から十二月二十四日まで、主催事業や協賛事業が開催されます。

さて、「生涯学習」という言葉は、私たちにとっては、身近に聞き慣れたものになっていますが、その経緯の概略は次の通りです。

まず、昭和四十年、ユネスコ本部（パリ）の成人教育推進国際委員会が開かれた席上で、ポール・ラングランという人が「生涯教育」について提唱し、昭和四十五年「国際教育年」を記念して、ユネスコ本部から出版されたのが『生涯教育入門』です。日本では、この理念をもとにして、昭和四十六年、社会教育審議会から「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について」という答申が出されました。岡山県ではいち早くこれらの理念を汲み上げて、昭和五十三年に第一回岡山県生涯教育推進大会が開催されました。当時、その担当として苦心したことが、今では懐しく思い出されます。

美作地区では、昭和五十九年に第一回社会教育研究大会が開催され、昭和六十三年には第一回美作地区生涯学習推進大会が開催されました。これは、自ら学習する人の立場に立った名称に変更されたもので、皆様のなかには大勢参加された方がおられることでしょう。なお、この年には、文部省に生涯学習局が設置されています。岡山県においても、平成九年度から生涯学習課が設置されました。そして、今ではすっかり定着し、学校教育の枠を超えて、いつでも・どこでも・だれでも学べる「生涯学習」の全盛時代のなかにあるのです。

美作市では、「第十九回全国生涯学習フェスティバル」まなびピア岡山二〇〇七 in 美作」と銘打って、その主催事業が、十一月二日から五日まで開催されます。皆様、どうか奮って御参加下さい。作東文化協会としまして、これらの事業に積極的に参加・協力すると共に、秋の文化展は言うまでもなく、春の書画写真展を「春の文化展」として、さらに充実したものにしてゆきたいと考えています。また、部活動をより活発にするため、各種のグループにも呼びかけをしています。

特に、今年、生涯学習フェスティバルが開催される好機ですので、「生きがいの創造と地域文化の振興」をめざして、生涯学習の推進に全力を上げているところですので、より一層の御理解と御協力をお願いします。

特別寄稿

物語の神さま

あさの あつこ

(作家 美作市)

ものを書くという作業は、なかなか力仕事である。無から有を、虚空から具体をひっぱりださねばならない。などと書くと、えらく大層でごりっぱな仕事のようにも思えるのだが、とどのつまり、どのくらい上手に嘘がつけるかが勝負だと思っている。

この上なく巧みな嘘をつく。騙された相手が終生、騙されたと気がつかぬような嘘がつけるようになれば一流。プロ中のプロというものだ。そういう意味では、小説家と詐欺師は似通っているかもしれない。

暴論でしょうか。
わたしは、まだまだ嘘つき下手で、物語のあちこちに綻びを作ってしまう。綻びに気がつき、慌ててつくるえば、またこちらがはらりと綻びる。情けなくて泣きそうになる。こうなると、書くことは苦行となり、我が身を苛むのである。とくに、出だしの部分はまさに荒苦行である。自分の納得できる最初の一場面、最初の一行、最初の一句を手に入れるために、延々と呻吟するのだが、呻吟の果てに一場面、一行、一句がつかめれば、まだしも、書かぬ前から綻びばかりが迫ってきて、結局、形にならないこともざらにある。物書きとはけっこう非効率な仕事なのだ。

それでも、ときに、神からの賜り物、天啓のように場面や言葉と出会うことがある。

去年の夏、百足に刺された。それも、真夜中に。生まれて初めての経験だった。ものすごく痛い。

何でこんな目に……と、半泣きだったのだが、ふっと閃いた。
これだ。

ずっと書きあぐねっていた時代小説の最初の場面。この百足をつかおう。ずくずく痛む首筋に薬を塗りながら、わたしは一人、ほくそえんでいた。

舞台は江戸の町、常磐町界隈の私娼窟。その一室で男は異様な痛みを覚え目を覚ます。隣には女が眠っている。そして、カソカソと乾いた音が……。

悩みに悩んでいた場面が開けると同時に、物語が前に進み始めた。一年の時を経て、今年の九月に一冊の本となり、上梓される。『夜叉桜』（光文社）。（すいません。何気なく宣伝します）

物語の神さまは、気紛れで薄情で、わたしのような半プロの物書きにはなかなか笑顔を向けてはくれないが、ときに、思わぬプレゼントを授けてもくれる。

神と己を信じて、もう少しがんばってみようと思っている。

少年少女の夏

岡田千茶
(朝日新聞岡山柳壇選者)

私の生まれた家は山家川のほとりにあった。川岸は孟宗の小さな竹藪、その脇に川へ降りる細い道があった。

少年の私は学校から帰ると、川へ行き担桶に水を汲んで四、五へん通い、風呂に水を満たすのが長い間の日課だった。風呂場は別棟に在って、土間から五十センチ程の高さに洗い場があり、檜の風呂桶が据えられていた。水を汲んでくると洗い場へ上がり、風呂に水をいれた。

十六歳の夏休み、大阪の従姉妹二人が来て逗留した。姉は少年の目にも清楚な美人、妹の由岐は、目許はぼつちりしていたが、体型は十四歳頃特有のぼつちりしたごつい感じで、お世辞にも美少女とは言えなかった。

ある日、まだ昼の明かりが充分残っている頃、風呂へ入った由岐が「お兄ちゃん」と私を呼んだ。熱いから埋めてくれと言う。水を汲んで来て風呂場へ入った。そのとたん、洗い場に立ちただかつてこちらを向いている裸の由岐の丸々とした下半身がまともに目に飛び込んだ。彼

女の狭間の陰りはまだ刷毛で掃いた程度だった。由岐は少しの恥じらいも見せずに私の方へ体を向けていたが、女性の裸を真正面で見たのは初めての私は一瞬目をそらした。隠そうと思えばタオルがある。異性の前で何故、彼女は裸を曝していたのだろう。今でも不可解である。

その夏の日以来、由岐から鉛筆書きのたどたどしい恋文めいたものが届くようになり、私も幼稚な恋情を感じて出来るだけ返事を書いた。彼女の手紙は決まって便箋二、三枚のもので、たわいなと言えばそれまでだが、同年齢の少女と接触のない少年にとつて、彼女の心の中を自分が占めていることが嬉しかった。

昭和十九年、十九歳の私は兵隊となり台湾へ送られ、復員したのは二十一歳、昭和二十一年の三月だった。

帰郷して間もなくのある夜、隣の集落に一家で疎開していた由岐が、母親に連れられて私の家にやって来た。母親は彼女を私に貰って欲しい口調だったが、ほの暗い

電灯の下で向き合った彼女は、恋文をくれた頃の由岐でないことが男の直感で分かった。果たせるかな彼女は、私より一足先に海軍から復員していた近くの男と恋に落ち、既にその時、その男と体の関係もあったのである。

それから十年過ぎた昭和三十一年、祖母の十三回忌の法事があり、私は岡山から帰郷。由岐も例の男との間に生まれた五歳ぐらいの男の子を連れてやって来た。どうしたことか二十九歳の彼女は、あの夏の日頃の少女のように思えた。「お兄さんちよっと」由岐に言われて、母屋と離れた所にある納屋兼用の新小屋の脇へ行った。

行くと直ぐ彼女はいきなり私の胸に顔を埋めてきた。人目のないことを幸いに、私は由岐と抱き合い、唇を触れ合った。それは一瞬の成り行きであった。

その年の秋、私は所要があつて帰郷、一泊して林野から岡山行きのバスに乗った。乗る以前から顔は知っている由岐の夫の姿を認めていて、今時、何故彼が此処に居るのか不思議に思ったが、互いに口もきかなかつたし、何となくそんな状況ではなかった。私は直ぐ勤め先の東警察署へ向かった。夫も黙って私のあとを追って来た。

署へ着くと、なんと由岐がそこに居た。昨夜、私を訪ねて来たのだと言う。彼女は宿直の警官と夜を明かした

ようで、和服の由岐はひどくやつれて老けた感じに見える。どの程度のことを彼女が喋ったのか分らないが、宿直の警官たちは私と由岐の顔を見比べて、にやにや笑っていた。家出した彼女の行き先は私の所と推察して、夫の行動だったことがはじめてわかった。

仕方がないから私は彼女達を連れて、懇意にしている近くの旅館へ行き、部屋を借りて話し合うことにした。その時どんなことを話したか忘れてしまったが、私の帰郷と彼女の家出は全く関係がない事。従つて私としては新小屋の一件はあるものの、すべて先方の問題である。まあそんな気分でしたようである。

勤めの身、何時までもそこに居る訳に行かないので、一旦、署へ戻り、急ぎの案件を済ませると旅館へ引き返した。彼女らの部屋へ入ると、何やら慌てた様子で由岐は横座りのまま、お太鼓の帯を結び直している。髪は乱れているし、ふたりの態度から、その部屋で今まで何が行われていたかが、一瞬にして分かった。どのような話し合いがあつたか知る由もないが、夫婦間の仲直りは最も直接的な方法でなされたようである。彼女らの一連の行動が分からぬではないが、滑稽なのは私の立場である。以来、由岐とは文通もないし、余り消息も聞かない。

書に生きる生涯を送って七十六年にもなる。それほど書というものが好きだから仕方がない。十八歳で書に志し、戦争中も浪人生活中も休まず続けている。途中で生活場所が変わり、職業もいろいろ移り変わったが、一本の入木道（書道のこと）を歩んで魂を込めた書の道で一人の修業であり、経済的に優位の職ではないが、「一以貫之」^か頑な男である。全国の書の同輩は全部死に、語る友も少ないが、心中期する誠の道が存在するのは、その道为师とした川合信水師が精神の育成をしてくださった賜である。書は日本第一と称される上田桑鳩師・方丈無二齋師・坊野喜月師・鈴木秋嶺師と四人が実技の師であるが、精神の上で私の私淑する師は一人も無く、大体は独学力行篤信好学の昨今である。終わりのない芸事^{げいじ}なので毎日己の心の開発と技術の向上に一日の時間が足りない。書を理解する人は少ない。公の書の展示会にも一遍も出品しない無名書家である。

故郷の僅かな人達が毎月遠方を何十年も来て心の通わす時は最高の歓喜と希望が湧く。もう古いも進み、身体的条件が弱まったが、まだこれから私の書の残る時が来るので、臨終の一時まで書くつもりである。養生第一に、信じていただける人になりたいと思う。父の訓に、出世するよりよい人になれと教示を受けている。また小学校の恩師であつた故横山正人先生の教訓が三ヶ条ある。それは

- 一、瞬間を最大価値に過ごせ。
- 二、個性我に生きよ。
- 三、多忙の中にも閑暇を見出して勉強すること個人、人類の生活なれ。

この三人の師の訓は今以て肝に入魂の言葉として、人間価値の増大に務め、社会の木鐸^{たたく}として生きるよう、心に定めて好学の一書生である。
年老いての拙文、どうか了解を乞うて一文を終わる。

肝感寸言

感想や批評を文章で表現する

簡単そうで難しい

しかし文章化されることで

新たな感想や批評が生まれる



洋画 末宗一之

出会い

江見英雄

偶然と云うか必然と申すべきか、私はこの頃、人と人との出会いと云うことに不思議なるものを感じている。それは近頃、少年小説「バッテリー」等、沢山の著述をしておられ、NHK等テレビにも出ておられる女流文士「あさのあつこ」先生とのことである。バッテリーが林野中学校はじめ県内各地でロケされるに及んで有名になり、私も一冊購入しようと思い、書店に飛び込み、その数ある書物の中、決定版八百円余りを買いたい求め、よく見たら数あるスナップの中に何と懐しい私の教え子、部下と本人の写真があるではないか。あ

さの先生がその父、尾川君と写したものであった。父は湯郷並びに岡山市で手広く経理事務所を営営しておられ、母君は県立林野高校の先生だった。私と父、尾川君との出会いは私が第一次戦争召集後、北満東部国境守備隊で「約十ヶ年、四千人の苦力」等使用して造った虎頭要塞」の基幹部隊、口径30種の長榴弾砲を以てソ連シベリヤ鉄道イマン鉄橋爆破し、戦争を有利に導こうとする目的だったが、私は一旦召集解除。今度は経済都市大阪の心臓部、船場警察に勤務していたところ、またまた再応召し、白鷲城下で砲兵10糧砲、所謂10

榴で新兵教育、やっと班長、分隊長として新兵をあまた数多、南方へ送り出し、やれやれとホツとしていたところ、幹部が呼んでいるとのこと、行ってみると、このたび航空部隊大増員で少年兵大募集につき君は琵琶湖畔天津陸軍少年飛行兵学校教育隊に転属して欲しいと云うので、やむなく承諾して赴任した。最初の部隊は機械化部隊、ここ姫路では乗馬部隊二度目の応召はただ単に砲兵と云うだけで、どこに振り廻されるかわからない。階級も上って、私は馬には乗れません、乗りませんでは任務を全うし得ない。そこで様々な苦勞して一人前の班長、砲車分隊長が務まり、新兵教育もできるように努力したのに、階級章が泣くぞと云われんでも済むようになったのに非

情なものだ。そうこうしている中に第何回目の入校生があり、あさのさんの父、尾川君も入校して私の隊に入った。近くの人だからお互い親近感があった。そして終戦まで共に在校した。

私は地元はじめ津山の北酪三ヶ年他、岡山市の旅館経営にタッチする等、なかなか自家営農はしにくかったが、当時、警察予備隊だ、自衛隊

だと日本原が欲しいと云う声しきりで、私が地元農協組合長当時、大体話をまとめて、一部を残し大部を国家の為やむを得ぬことと譲渡を承諾して立ち退き、帰郷した。その間いろいろ不合理なことも多かったが、大体所期の目的を果して解散した。この時、交渉相手は元天津陸軍少年飛行兵学校文官教官（自衛隊付の）防衛施設庁長官だった。

蝉の声

井上健一

私が子供の頃には、夏になるとよく蝉取りをした。

その頃には既に捕獲網はあったが、そんな気の利いた物は使わない。捕獲網は枝にかかるように破れて

しまうからだ。

ではどうするのか？

まず二mぐらいの細身の竹を用意し、その先端に割った竹か太めの針金を、楕円型に付ける。

次にジヨロウ蜘蛛の巣を探し、蜘蛛の糸を先ほどの楕円に巻きつける。これで道具は完成する。蜘蛛の巣を絡めた楕円を、蝉の背に近づけると、蜘蛛の糸に蝉が絡まると言う訳だ。ふと足元に目を落とすと、あちらこちらの草に蝉の抜け殻がある。抜け殻ではない蝉を見つけようと、早朝にこの場所を訪れると、脱皮前の蝉を見つけ出せることがあった。

それを蚊帳に留まらせて、よく脱皮の様子を観察したものだ。

昔話はこれくらいにして、こんな蝉の鳴き声を聞いてみると、面白いことに気がついた。

最初にニイニイゼミが鳴き始め

る。鳴き方は最初チツチと鳴き、チ
イージーに変わる。

数日後にアブラゼミ。これはいき
なりジージーと鳴く。

そして朝夕になるとヒグラシが鳴
き始める。

ミンミンヤツクツクホウシと続
く。

ミンミンヤツクツクホウシ等は最
初の鳴き方と一端鳴き始めてからの
鳴き方が、全く違っているのも面白
い。

長い間はこの四種類だったが、最
近クマゼミの声を聞くようになって
た。

調べてみると、一九九〇年頃から
年々北上しているようだ。

地球温暖化は確実に起こってい
る。

やかましい蝉の声も、地球温暖化
防止の警鐘なのかもしれない。



老いのたわ言（無常の風）

吉 政 実 夫

人間にとって、一番恐ろしい嫌い
なもの、知恵者も愚か者も一度は迎
えねばならないもの。

救急車の他人事、葬式は外所村の
出来事。いづれも気にせず平々凡々
と日常生活を過ごしている矢先、な

んの前ぶれもなく、無常の風は、平
和な家族の一人をさらって行った。
一分、一秒で助かったり、無常の
風にさらわれたりする。

人間世界では計り知れないことが
毎日のように起こっている。

また、自ら、無常の風を迎える。
来世の楽土を夢見て、自殺していく
人もいる。

国会では、自殺防止法案が可決し
たが、どれほどの防止ができただろ
うか。

今こそ、一度失えば再び戻ること
のできない流転輪廻の末、生まれ難
くして生まれた命の尊さを学ぼうで
はないですか。

娑婆世界こそ、我ら人間にとって
最大最高の殿堂であり、一度失えば
再び戻ることのできない世界であ

り、今日ただ今より、無常の風に負
けない心構えを身につけたいもので
す。

一人来て一人去る、無常の風には
同行することはできない。それが決
められた人の運命なのかなあ、と、
毎年のことながら、老いのたわ言を
並べてみました。



写真 小坂田 貢

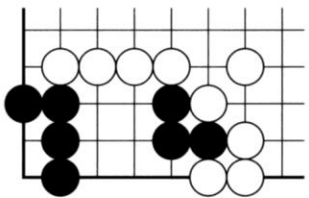
棋道部より

詰碁

黒先生き。

1手目がポイントです。

(5分で中級)



解答は24ページ

随筆随想

おりにふれて

感じたことや

見聞・体験を

なにくれとなく

書き綴る

思いのままに



書道 妹尾 美智子

「剛」のたわい

藤本 伸子

僕は犬の「剛」です。平成十年生れで今九歳です。僕は生れた時から木村家の家族と生きていました。お父さん、お母さん、小学六年のお姉さん、小学四年のお兄さんの四人の家族の中にかわいがられて育ちました。後で知ったことですが、お姉さんが学校の帰り、道端のダンボールの箱の中に入れられて捨てられていたのをひろって帰ったのだそうです。小さくて黒い塊のような僕が震えており、ミルクをペチャペチャ飲んだのが始まりだと、お母さんが話してくれました。朝は、お父さんが、出勤前に散歩をしてくれ、夕方には、

お婆さんが散歩に来てくれ、僕を連れて三十分ほど歩きます。お婆さん曰く、「自分も散歩できるし、一人で歩いていると認知症と思われる」とのこと、僕も少しは光っているのかな……。

道を歩くのに、右に行ったり、左に行ったりするので、お婆さんが言います。「右側通行だよ。箸を持つ方が右だよ」と……。でも、僕は食事に箸を使いません。四つんばいで口だけでドッグフードを上手に食べます。

お姉さんは今、大学生で京都に行き家に居ません。お兄さんも高校三

年で大学受験もあり、毎日遅く帰るので、僕とは遊んでくれません。お母さんもお勤めでいつも僕は留守番です。でも、夕方四時頃にはお婆さんが散歩に来てくれます。お爺さんと車で来るのですが僕の為に新車を買ったと言いました。本当かな!!

僕は、青年時代を過ぎて熟年に成っているはずですが。でも、脚も丈夫で鼻息も荒く、綱を持っている老人を引っぱり張ります。時には老人が躓いて転倒することがあると、引き返して顔を覗き込みます。

僕は、お婆さんとの散歩が大好きです。お婆さんも「私を癒してくれ心安らぐし、嘘は言わない澄んだ美しい眼をしているお前が大好き」と、ほおずりしてくれます。お婆さんにも友達や尊敬できる先輩が居るので

しよう。僕は安心しています。

心がかよい合っている木村家の家族の一大として家を守り家人の送り迎えをして、平和な毎日を過ごして

先生ありがとう

昨年十二月三日、私の敬愛する香山勇作先生が亡くなられた。

八十の坂を越えておられながら、万年青年のように明るく、いつ接してもユーモラスな話をして周りを楽しい雰囲気になされ、元氣そのものの先生が亡くなられるなんて誰も予想だにできなかったことである。

先生は本当にすばらしい人でした。私達の心の支えでした。

平成十一年福山小学校閉校の時に

います。

。やすらぎで背中合せの犬「剛」よ冷たき鼻が我が頬に触る。

井口祥子

は、記念誌作りの実行委員になっていただき、

「昔使っていた教具の写真を撮り、それを載せたらどうだろう。」

「昔の教科書、一年生が初めて手にする本の一ページを載せるのもおもしろいよ。」

「通知票や卒業証書もいろいろ変遷があるから地域の方々に提供してもらって載せたらいいよ。」等々、たくさんのアイデアや示唆をいただき

き、福山小学校閉校記念誌を作成することができた。

そして、一番身近に接することができたのは、平成十三年七月より私の家まで足を運んで下さって詩吟を教えて下さったことである。先生は三十年以上も国風流の詩吟に励んで来られた大ベテラン、この道の師範。

「おい、来たぞ。」と笑顔の先生が部屋に入って来られると、ぱっとみんなの心が明るくなる。まず、漢詩を読み、漢詩の意味を近所の人や高齢の母や私にわかりやすく説明されると、漢詩にうたわれた情景が目にかげ、漢詩の心を理解することができた。

また、先生が吟じられる声は、力強さと声量があり、先生のように腹の底から吟じることができたらなあ

といつもあこがれ、力を入れて吟じてみても、いがり声ばかりになつてうまくできない。

「道というものは、長い年月をかけてできるもの、ちよつとやそつとで到達できるもんじゃない。」

「山の中で大声で吟じてみい。誰もおこるもんはおりゃあせん。気持ち

がええぞ。」

「吟ずる言葉は、はつきり発音せりやあいけん。」等々時には厳しく時にはやさしく導いてくださった。

先生ありがとう。先生から数々のお教えや生きる原動力をいただきました。

父

どうしたのだろう。近頃よく頭に浮かんでくる。それは今は亡き父、百太郎のことです。時代はずつと昔、終戦直後にさかのぼります。小学校三年生の頃「百太郎（ヒヤクタロウ）」を「ももたろう」と云っては男の子たちからかわれていまし

岩本全子

た。でも私は平気でした。あの桃太郎のようにスバツとして正義感の強い人だったからです。今年六月に七回忌法要を致しました。それから何かにつけて思い出します。大層きびしい昔気質の人でしたが尊敬できる人だったと思っています。私の家は

貧乏で学校に進めなかったようです。運よく昭和十一年今の姫新線が開通し国鉄に入り、東京の教修所に入学させてもらい勉強にうちこんだようです。その甲斐あつて人の上にも立つ身分になったようです。卒業してからは単身赴任が多く家に帰った時はよく話をしてくれました。その中で「これからは勉強をしつかりすれば誰でもチャンスはある。そういう時代がくる。」と。

父は物静かで一度もたたかれたことはありません。「いい子だ、いい子だ」と云つて育ててくれたことをありがたく思っています。

父母の努力で私も人並に高校、短大と進むことができました。その時の父の心のよろこびはと思うと胸が一ぱいになります。本当にありがと

うございました。

父の話の中で一番重要なことがありました。「眼の前に今することが五つ位ある時、どれを最優先でするかが問題だ」とも教えてくれました。本当に大変重要なことです。現在、私は毎日この問題に直面していま

可愛い曾孫

私には息子一人娘二人居りました。曾孫が現在八人居ります。上が小学校二年生、下が今年六月に出産したばかりです。男三人女五人でどの曾孫もすくすくと大きくなって居ります。

我家は三世帯で内曾孫は一年八月で女の子です。母親が勤めを続け

す。その度に「父母のありがたさ」を感じています。

いつもよく考えて心ゆくまで努力していきたくと思っています。

今もどこかで、心配していることでしょう。

加藤美雪

ましたので家の祖母と、実家の祖母と私（曾祖母）の三人にみてもらうことにするのでよろしく頼むと云われました。其の折は私の膝で抱っこしていたら二時間ぐらいいはテレビを見乍ら抱っこしてよく寝てくれますのでこれくらいとはと引き受けました。「這えば立て、立てば歩きの親

す。土曜日は私のリハビリの日でもう二年も続けてそれぞれに友達もできまして楽しみにして居ります。孫

嫁の実家のお母さんもよくして下さいますので曾孫も朝早く七時半には家を出発して津山方面へ行きます。

これも親子どちらも大変のことと思われませんが、私達も一層張り合いができて老の身に鞭打ってやって居ります。また家の上の畠で家庭菜園を楽しみに足腰の痛みも辛抱して横車に座りあつちこつちと三台程置いて何もかも忘れて育て、収穫して食膳に出ますのを楽しみにして居ります。こうして楽しく過ごせるのも一家三世帯がそれぞれお互いに愚痴を云つても堪え合つてすればこそと感謝して過して居ります。息子、孫夫婦より私の八十六回目の誕生日、七

月五日に真心のこもったお祝の品物をいただき、今更の如く此の世に生れたかいいもあつたとつくづく生命の有難さを感じ尚更曾孫の成長を楽しみにますます健康に気を付けて楽し

台風余感

台風が近づく頃になると思い出すのは昭和九年九月の室戸台風である。阪神間や大阪を襲い何でも大阪では一八〇校位の学校が大なり小なりの倒壊で残った校舎には俄に木造の三角形の補強工事が施された。当時私は阪神西宮に住み阪神電車・大阪市電を利用して守口の学校へ通学して居た。其の西宮の港には大きな船が打上げられ横倒しになつてい

みをもつて頑張つて行き度いと思つて居ります。

台風過ぎ

曾孫シルバーカー乗せ散歩

江見英雄

た。街の工場では海水がひいても塩水につかったモータ等は其の俣では使用できず外して七輪コンロ等によく乾燥せねば使えぬ。またそれまで台風の経験のなかつた為、各戸の屋根瓦等の保持悪く強風に依り瓦は木の葉のように舞い飛んだ。また高潮で川水が逆流してどんどん水嵩が増し、低い倉庫等は水浸ひたした。茲で思へらくよく喧嘩等して、太陽が西か

歴史紀行

大きなできごと

些細な歩み

みな

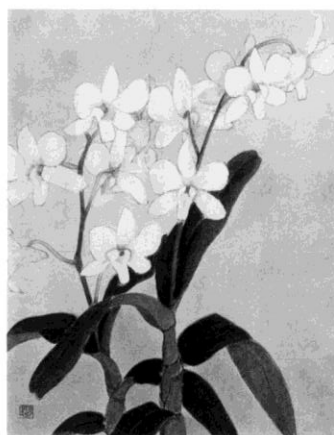
人間の歴史

かたりべとなつて

伝えよう



紀由名春花生



子縫田原日本画

ら出やう共河水が逆様に流れようとも決してどうこう致しませぬ等の言葉は云つてはならぬことを知る。其頃西宮から大阪梅田迄の普通往復運賃は三十八銭だった。市電回数券は学生だから一枚四銭だった。市電が通じている限り何十キロ乗っても四銭は安い。台風の高潮で市電の回復が手間どりに難儀した。それと云うのも車庫なるものが築港や泉尾と云う港に近かつた所為だった。当時学校では難しい科目もあり、興味のもてぬ学科もあったが、国語担任の保仙先生と云う方は山口県視学から転任された誠に人格円満熱意を以つて指導下さり流暢平明其の御講義には全く感じ入った。中でも藤村詩集「時は暮れ行く春よりぞ、また短かきはなかるらん、うらみは友の訣れより

更に長きはなかるらん、君を送りて花近き、高樓迄も来て見れば、緑に迷う鶯は、霞空しく鳴き叫び、白き光は佐保姫の、春の車を照らすらん」等や若菜集のおえふ等々。また太平記日野俊基朝臣のだったか。説かれた処は七八十年経た今日も尚耳目に残り追慕しきり感謝申上ぐ。因みに私は志願に依らざる陸軍曹長だった。今一つ此の大原断層の近くに住み日々の無事を何よりも感謝すべきであると思う。

上福原と下福原村間の地域名は 『英多郡英多郷』福原村だった？

加藤 芳英

平福村は、明治五年の新地名（平野村と下福原村を合併して平福村）として生れた。

平野と下福原を合せた地域を、中世では平野村と呼んでいた。江戸時代になって、平野村が平野村（天領・竜野藩預）と下福原村（沼田藩）に二分割。吉野川左岸の山口村西隣に今も下福原の一部が蔭（下）福原と呼ばれ残っている。

『美作町史・地区誌編』（平成十六年）に①下福原村は、古くは福原という地名だ。②上福原と区別するため下福原になったと、書かれてある。この①②の示唆から、数百年以

前の昔の時代、上福原より西方に在る原、山外野、山口、平福が福原村だった、ということを知り得る。上・中間下を一体化した福原村であったと、推察しうる。

英多郡は古代と中世の郡名。近世以後は英田・吉野郡に分かれた。従って古き英多郡英多郷は、少くとも上福原と福原（原、山外野、山口、平福）と河北（四百余年前の天正年中、川北、峠、南海に三分）で構成されていた。

英多郡の郡家（政所）の場所は何か？

『英田郡誌』（大正十二年）は次の如

く書いている。「財田真人若建王なるもの孝徳天皇の大化二年吉備の縣郡の大領となり：阿賀多の生木原清水丘に移る」と。

幕末の高名な歌人国学者の平賀元義は具体的に「郡家は郡の政を聞召す処也、此郡家は英多の郷平野村にあり、俗に平野の別府ともいふ。」等『美作風土記略』（平賀大人口授・英多郡ノ巻）に書き残している。

『美作町史』は、平福の稻荷神社（宮山）から一ノ川の清水途にかけた場所等を、政治の中心の在った所と睨んでいる。

郷村の境界は、戦争合戦の戦後処理、領主交替等で変貌してきた。

英多郷（上福原、福原、河北）の郷土史を説明していけば、檜原、江見、川会、巨勢、林野、粟井、広井

の各郷の究明を促進するだろう。『美作市郷土史』を充実させよう。

原部落久保木在住の片山武範氏は、次の注目すべき談話をされた。

①江見小の校歌にある郷路山の地名由来は英多郷の主要道路が通る山であるからと思う。

上福原、江見休所、原、山外野、山口、鈴家からの道路が、郷路山に隣接する福山の高原に集って、八塔寺、和気、山陽道へと通じている。村々の一体化・交流に郷路山と高原は、東部の拠点として貢献した。

②高原に近き原部落領域内に、「長者屋敷」（礎石が残る）、「火の釜」「赤羽」等、開発関係の地名が伝承されている。

タタラによる製鉄・銅・炭に関する地名や寺名に「福」や「黒」のつ

くことが多いと言われている。「長福寺」「福本」「福原」等々。

動き始めた出雲街道とその周辺の掘り起し

春名 正昭

ご批判とご教導の程よろしく（電話七五―二六二四）。

ふるさとの再生が叫ばれはじめてもう久しいが、今、地域は高齢化や少子化に加え政策の転換によって、過疎が進み大へん深刻な状態。特に片田舎においてその傾向が大きい。今の時代、自分の身は自分で守り、わが地区（地域）は我らで守るという自立自衛の精神に徹して努力しても、限度があり事態が解決するとは考え難い。

生れ育った故里を住みよい環境にすれば、人の心は落ち着き安心して

暮らせる。魅力あるふるさと作りで人を呼び、この地が振興すれば、活気を取り戻すことが可能となるのではない。故里に想いを馳せるとき、先人が築いた有形、無形の財産は、永きに亘る歳月の英知と苦勞の末に生れた結晶であり、決して粗末にしてはならない。私たちの周囲には、数多い名所、旧跡が点在し、これらは歴史的にも貴重な財産であり、後世に残し伝えたいと考えた。有志が相集い去る平成五年（もう十四年も

経過)に会員三十名によって「出雲街道土居宿を後世にのこす会」を結成し、現在に至っている。結成当時は勿論のこと、今でもこの会をもう十年早く発足しておれば、土居宿場内の家並みも残っていただろうに……。との反省の気持がある。しかし、致し方ないこと、現在あるものを大事に保持することで、地域おこしに努めるべきと考え直して、地味な活動を続けている。

特に力点を注いでいるのは、「土居の自然の道」の保全。道幅約三米の草刈り作業、路面や路肩それに側溝の保守整備などを行うことで、自然の道に相應しい、全国に誇れる昔からの出雲の道として、延長約八〇〇米の保守管理に当たっている。

近ごろ、当地に歴史探訪の人影がた。これからは、各市町内が独自の特性を生かし、相互が連携しながら活動することとなっている。今後は街道メインの部分から枝分れした箇所にも踏み込んだ史跡等の掘り起しがなされるだろう？興味津津

まさに街道周辺の掘り起しは始まったばかり。かけ替えのない我ら故里の再生を願って止まない。

目立つようになり、地元民への話し掛けも多くなった。「家並みは大したことはないですが、どことなく宿場の名残りがあり、素朴の中に落ち着きが見える。旧蹟などの標示板、案内図などあって、来た甲斐がありました。」と言われるとうれしくなり、これからも、同志とともに頑張っていこうと、やる気が湧いてくる。

平成十三年五月に復元した西惣門の門下においては、五年前から地元女性の会による「出雲往来ふれあい市」を開店し、今では地元や近郷からの来客を迎え、賑やかな開店光景が見られるようになった。手づくり料理の販売の補助役として、私たちの会も協力して地区の活性化に繋がっている。

ここからは、県内の出雲街道の動

きについて申し上げたい。

昨年、津山市を中心にして、東西の街道(宿場は七駅―土居宿、勝間田宿、坪井宿、久世宿、勝山宿、美甘宿、新庄宿)の各市町村が連携して、活動の輪を広げようとの呼びかけがあり、当会からも三名の若い者が、津山市での準備会に出席、各地の盛上りで計画が進んでいった。

今年に入り、本市においては「美作市出雲街道再発見の会」を立ち上げ、三月十一日(日)には、市内北山の社協多目的ホールにおいて、歴史研究家の宗森英之氏を講師に講演を依頼し、八十名にも及ぶ聴講があった。また、希望者による散策もあった。

その後も真庭市勝山において「出雲街道シンポジウム」も開催され



洋画 佐々木 巨

棋道部より

詰碁 解答

黒1のコスミ、この一手で黒は生きることができません。白2には黒3と打ちます。黒1で3のナラビでは、白1の所にツケられ失敗です。

短文集

生きている
あかしとしての
自分の思いを
自分の言葉で
表現する
その表現が
万人の魂を
ゆり動かす
短文芸の力
伝統文化の力

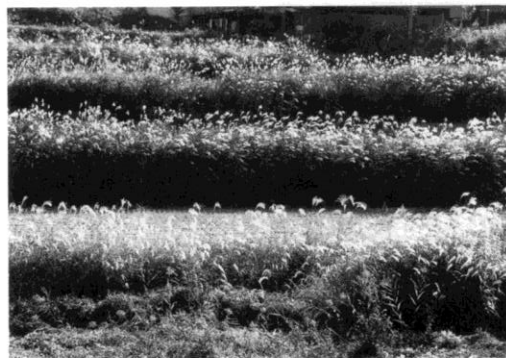


写真 長瀬昌一

詩

『栄光のなでしこ』（湯郷ベル応援歌）

田中清一

一、厳しい行者の雪もまた

解ければうるおう美作路

若い体も 涙も 汗も

どんと耐えれば 晴れの国

ここ 岡山に 日本に

世界に咲けよ なでしこよ

我らの華ぞ おお湯郷ベル

三、作州いで湯の美女もまた

ひと度起てば桃太郎

若い血潮を たぎらせ 燃やせ

どんと挑めば 晴れの国

ここ 岡山に 日本に

世界に輝け なでしこよ

我らの憧れ おお湯郷ベル

四、瀬戸内海の島もまた

橋で結ばばみな仲間

若い英知で 守って 攻めて

どどんと勝ちぬぎ 晴れの国

ここ 岡山に 日本に

世界に羽撃け なでしこよ

我らの誇りぞ おお湯郷ベル

二、鋭い武蔵の剣もまた

辛苦を越えて成った技

若い力で 鍛えろ 伸びろ

俳句

野火

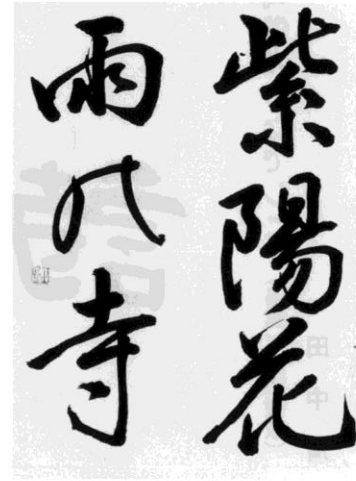
山本登山

眈の凜とし野火を見つめ居り
鳩の巢を気づかい落とす池の水
秋暑し一片の雲動かざる
日矢太し丘ごとごとく花芒
旅人に焚火の席をゆづりけり

産土讚歌

江見英雄

産土神のみ恵みありて今を生く
国土あり何もて報い果さなん
何事も無きが神験のはじめなり
四士若く如何なる思い残すらむ
玉串を献げて安き鎮まりを



書道 春名正昭

強食弱肉

山下照夫

鬼やんまよくぞ小蟬を獲りにけり
やんまとて燕の餌食なりにけり
女郎蜘蛛己に勝る蟬を喰い
螳螂は背中の雄をひとかぶり
あきあかね飛べどもイラク地獄なり

夏

田中清一

この刻を咲きどきと知り蓮の花
欲張るか重たかろうぜ蟻の身に
赤裸裸に戦火を染めし夾竹桃
一匹の男謳うやほととぎす
マスコミの大砲がゆるする夏の陣(参院選)

飾焚く

春名静山

幼より同じ処に飾焚く
去年此処に蜂がおりしと墓掃除
瓦葺く屋根師に時雨来ては去り
投げ入れて柚子湯の柚子となりにけり
花の宴夢見て桜苗木植う

風光る

青山元江

喜怒哀楽共に歩みし初鏡
夫愛でし形見の赤く寒の梅
農好きの嫁の鋏先風光る
大地這う自由気ままに花南瓜
夏草や終の住まいと決めし庭

柿若葉

樽井清江

見つめれば梢にたまる春の雨
垣根ごし芳香を放つ藤の花
朽ちし実を一つ残して柿若葉
物置の屋根包み込む柿若葉
畑の隅蟻の道あり我が家まで

百花繚乱

宿野淑子

わが庭は百花繚乱賑にぎはひて
幼児の頬染める春の雪
たんぽぽの舗装路割りて咲きにけり
心の傷癒やしの曲静かに流る
訪れし教へ子の声はづみけり

老木

加藤美雪

散歩道落葉敷きつめ風強し
梅咲きて孫の式にぞ杖つきて
柿若葉日毎に色濃く目にしみる
老木といえども聳え夏の庭
日照りにも力あわして蟻の群

白牡丹

春名波留夫

美作は旨き酒とや白牡丹
前垂れのまだとれぬ子や水温む
降るもよし止むも又よし蟬時雨
浦の月海鳴りの詩うた聞いてゐる
大窪寺おほくぼじお百度の子の息白し

偲びつつ

真野雅子

腕白の素足の靴に蝶が来る
夏休み孫がいじくる亡夫の竿
らつきよ漬亡夫の好みにかめの中
釣好きの亡夫が揺れてる土手柳
ときめきが子供に戻る大花火

夏至の雨

高橋ヤエ子

水漕の亀首のばす夏至の雨
木洩日の蟹に餌をやる子の日課
就職の旅立ちし日の桜かな
楠若葉築城偲ぶ忘れ石
白藤の香る山寺妙好人

水仙

井口祥子

水仙の白さ我が背をそつと押し
老いゆくも花見るゆとり我にあり
目標へ日々のお稽古柿若葉
雨蛙ひたすら土下座動かざる
我が胸にすつと飛びこむ迷蛭

折々に

杉本幸子(土居)

今年また一輪のみの寒椿
くずれ落つ廃家に舞い散るばたん雪
山桜咲きて胸刺す思い出や
風そよぐ青田や鷺の舞い降りし
すばらしき夕焼を見せひと日暮れ

優しき能登香の風

森本久子

花咲いて心たのしい春便り
老重りし友なくば長い一日やつとしづみし
古い母を日傘の下に入れて孫娘
今朝開く百合を佛に供へけり
優しくも青田一面能登香の風

土動く

坂部金治

一陣の風に落ち葉が空に舞う
カサカサと鳴る足音や枯れ木立ち
早春や躍動秘めし土動く
湯の宿の庇の果てに雪景色
黄砂来て里包み行き山を消す

麦の秋

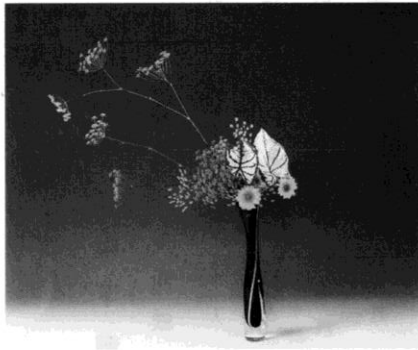
坂井はつ子

羊蹄が畦より一步内に入る
縫うてゆく山のあはひの新樹光
木道をピッケルつく音水芭蕉
新緑のうつる廊下を開け放ち
熟れに熟れ燃え上るがに麦の秋



日本画 小坂田 初子

川柳



生花 樽 井 清 江

神感朝夕

江見英雄

重くとも太鼓持上げ愛宕祭
仙台の友の言葉に癒される
藤村の詩集の厚さ驚きぬ
親心遠き想いはわかるまじ
大らかな気持忘るな何事も

転ぶ

春名静山

七転び八起き貧乏抜けて来た
腰に鳴る下校途中の鈴の音
襲い来し熊を咄嗟に背負い投げ
弁当はおにぎり昔尋常科
バスガイド笑顔振り撒く春の旅

想定外

山下照夫

合併で市となり暮らし尚厳し
松坂君気の遠くなる金^{かね}入り
佐賀北は粘りに粘り頂点へ
小澤殿辞めるつもりが辞められず
総理殿開き直って居座りか

合鴨田

山平順三

不耕起の二枚の田んぼ手植えする
薩摩鴨長旅をして家に着く
草枯らし蒔かずに作る二枚の田
合鴨に草取りまかす我が田んぼ
クソガラス雛を食べられ涙する

他人

山本千恵

生も死も他人次第できまります
他人事明日は自分にふりかかる
世の中も他人事ではすまされぬ
しおらしく生きる他人に教えられ
身内より他人に早く話したい

風

太田智子

元気がい緑の風が肩たたたく
知らないのそつと教えてくれる風
節くれの指が知ってる土の精
一生涯飾り気もなく土臭く
逆風でも農は私の終の友

道

山本昌子

葛かずら伸びて道消す過疎に住む
気心が解りあえてる村の道
人の道論すも勇氣のいる時世
道標ない人生を浮き沈み
ここからをどう生きようか女道

チャイナ服

山本登

人生を生きた証の皺があり
飲み会と言えば軽い財布を渡される
姑娘の足が気をひくチャイナ服
娘の古着今は案山子の晴着です
軽いと言ひ歪^{ゆが}んだ顔に意地が見え

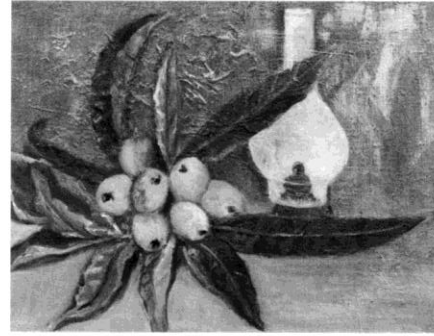
祈り

原 幸子

早合点振り鉢巻飛びだして
集會に逢いたき人は欠席し
欠席と書いて投函気が重い
登下校はつきり挨拶出来る少年
青空に争い無き世を祈りおり



短歌



洋画 田中佳栄子

直会の酒

三木泰葉

きさらぎを母の逝きにしふるさとに直会の酒礼な
して受く

山深く木木に混じりて山桜くれなゐうすく咲きし
づむなり

春たけて茅花波うつ峡の田においておいでと母か
顕ちくる

命

黒石登代

向う山よりふいに聞こゆるこだまあり耳なれしこ
れは亡き夫の声

大根を抜けばぼつかり残る穴この世抜けたる人の
穴はや

一耗に満たざる双葉がそれぞれに露をかかけて命
を示す

古稀

坂井はつ子

私が古稀になるなど信じられぬ迂闊うくわつにき
よろりきよろりよ

一どきに二足の靴は履けまじと衝動買をおさへつ
つをり

五本指の靴下履くに退化して豆のやうなる小指を
見つむ

鶏インフルエンザ

阿部すみゑ

怯えつつ戸惑ふばかり一日が消毒に始まり消毒に
終る

鶏飼ひの五十余年に終止符を打つは近きカウイル
ス迫れば

鶏の移動やうやく解かれし三月一日縄もて新聞を
縛り上げたり

ヌートリヤ

加藤幸子

平静を装ひし顔にマラソンの選手ら徐じよに足を
早むる

温暖化の対処会議をするといふ人間の力どこまで
及ぶ

動物愛護のもとに保護さるるヌートリヤキャベツ
二百を喰ひ散らしたり

受難

山下照夫

連日の猪害に臓腑煮えたざり頭冷やせば我も亥歳
ぞ

土用過ぎ猛暑の中で君は逝き誰も見とらず只ひつ
そりと

兵力を増強すれど如何せん武力で他国自由に出来
ず

あさのさんあつこさん

江見英雄

湯の郷にゆかりの人の住むと云う奇しき縁に吾は驚く

年毎に御祭重ね五十余度明石の浦に同志集う

吾が余生幾ばくあるか気にもせず九十二歳を古文出し読む

桜

春名静山

ゆくゆくは村人集いて花見をと夢見て桜の苗木を植うる

裏庭に妻と憩えば手移しに馴れたる亀の餌ねだり

寄る

四十年煙草作りし畑荒れて茂り茂れる葛に花咲く

夏

角利津

家族とふしがらみが好き夏が好きやがて寄り来る族等が好き

父の釣りるし川瀬は風に光りつつ姿顕たせぬ魚籠持つわれも

釣竿は父の思ひが伸子には母が宿りて捨て難くあり

大和に最後まで戦ったのは温羅

加藤芳英

「吉備津彦」まこと吉備への占領軍掠奪者よ消されしは温羅

岡山の温羅じやの祭り悲しかり亡ぼされし側の歴史捏造され

桃太郎の鬼退治斬身勝手なる朝廷側の征服斬か

命をも干す

横山 すみ子

夜更けつつ娘と交はす長電話はなしの合へる歳となりてか

梅雨明けを待ちて梅を干し紫蘇を干す空の青さよ命をも干す

幾世代のちの子孫へ命つたへよ我と息子が植ゑし藪椿

春の風

横山 昌子

ひねもすを黄砂にけぶる春彼岸真赤に大き太陽沈む

うす赤き馬酔木の花に春の風激しく優しく花房ゆらす

幸せは心の持ちかたそれだけと思ひて今日は菊苗を植う

広きが中に

横山 美恵子

向う田の広きが中に老二人さし苗しをるに我を重ねつ

一年余空屋となりて静もるを家守るがに白百合の咲く

千の風のCDを妹送り来ぬうから集ひし夫の七回忌に

をりをりに

加百 由起子

いぬふぐり仏の座なづな踊り子草きそひ咲きをりわが散歩道

皴も減り日焼け戻りて若若し農の暇なる冬季のわが手

霜焼けて赤く太れる耳たぶが福耳のごとく見ゆるもをかし

八十路坂

小林 増代

若き頃集めし木の花草の花が余生短き我の慰め
まづ先に知人の歌を読むなれば我の歌など幼稚の
限り
それでも尚我には大事な呆防止我には私の思ひの
ありて

冬 陽

宿野 和穂

冬の日の入り来る部屋に鳥たちのさへづる声を聞
かぬも淋し
生にも死にも深くかかはる桐の木も棟の木をも要
らぬ世となる
倒されし棟の木より落ちたる実宝石のごときを冬
陽がさらす

深 緑

原田 順子

病窓に夏鶯を聞きをれば頻りに鳴きて我を癒すか
深緑の山にベールをまとふごと朝まだきを霧ふん
はりと出づ
ふと匂ふに見れば白百合活けてありすがしき満つ
る梅雨曇りの日

夫と歩みて

有 元 理嘉子

幼日に赤き山百合取りくれし夫と遊びし山道を行
く
亡き夫の日記開くれば我が病みし二十日の暮し詰
まりてゐたり
からオケに夫のおはこも飛び出して我に住みゐる
夫と歌ふも

父恋ふ

新田 千晶

われの知る父の姿は軍服の額に納まる二十代のま
ま
ラバウルにて逝きし父との思ひ出はなきまま六十
年を過ぎてしまひぬ
行くことも叶はぬ島のラバウルは父恋ふ地として
わが裡にあり

春の足音

梅本 信恵

さざ波の光る吉野の川沿ひを歩めば土筆が数多出
てをり
めぐりの田に菜の花れんげ咲き乱れ花に飛び交ふ
蜜蜂の群
山裾の小川に架かる橋ゆけば流れにそひて山女魚
も泳ぐ

動かざるまま

新免 三代

長雨に清しき白の浮きたちて裏庭もてなしくるる
十葉の花
長雨の暗鬱の宙に点となる逆さの蜘蛛は動かざる
まま

ひと枝の終の証かその枝の命の樹液にぶくぶくら
む



写真 水 島 正 崇

名月

井上 智

風雲が流るるはさまを名月が出つつ入りつつ走り
ゆくなり
晴れの日が続きて真澄む空の下もえにもえ咲くサ
ルビアの花
雨降りて一夜で太りし茄子なり滴るむらさき籠に
あふるる

鴉

藤川 亜也

鴉見て花見て思ふ歌心惚けるな急ぐな鴉が笑ふ
新しく眼鏡を替へて鬱の字を見終へて空は明るく
なりぬ
石路の花陽に黄色く映えをりて蜜蜂二匹花を飛び
交ふ

子供歌舞伎

名部 みどり

清き瞳口一文字にひきしめてあどけなき歌舞伎に
みなしづまりぬ
京都を巡り帰りは西へと思ひしに眼下にあこがれ
の近江の湖
意識もどり瞳きらりと光り来て八十路の兄に再び
の生

折折に

清田 三智子

新聞にのりたる歌のわが短歌つたなきままに活字
となりぬ
暖冬で雪なく作物を案じをり降れば雪掃きに困る
我なるに
久しぶりに曾孫きたれば玄関にそら豆の如き靴が
ならびぬ

南の海に

原 幸子

八重山の島めぐり来て水牛車に揺られて聞くは三
味線島唄
青き海見ながらつきし石垣島珊瑚の海はダイビン
グを呼ぶ
河鹿園泊りし客の数々の残して行きし筆の跡見る

水無月

内藤 慶子

ほととぎすてつぺんかけたかと聞こえ来ぬ外か
思へば我家の電話
庭先に広がる枝はラベンダー梅雨の晴れ間香りた
だよふ
荒れ畑に桑の実熟れてのどかなり笑顔の口も手も
紫よ

追憶

青山 元江

几帳面に購入月日書き込みて家具に遺せし夫の筆
跡
「淋しくは無いよ」と強がり言いつつも梅雨長引
きて人ぞ恋しき
這いつつも草取り出来る幸せに夏の野菜が応えて
くれる

曾孫

光井 房子

大泣きし我が意を通す曾孫に愛情たつぶり母子の
絆
一升餅を背負ひてよちよち歩みゆき筆を選びて笑
顔を見せたり
母の手を背にしつかり歩いて花束を新婦に贈る一
歳のひ孫

ふる里

荒尾 登志糸

青色を点滅させつつ螢とび川面に映るは天然の舞
新緑の谷間に映ゆる山つつじ車窓より観る四国路
の旅
過疎の村亥の子を祝ふ子供らは人数足らねば親も
連れ出す

刻こくと

池田 保子

刻こくと臨終迫れる父の目に涙うすらと滲みては
こぼる
明治より生き来し父の生き様をこの骨太は物語る
かや
淡雪舞ふ聖山の地を巡りつつ高野の山の歴史にふ
るる

旅

名部 和子

鳴戸橋より渦巻く大渦みながらに観光船の人に手
を振る
千里浜のドライブウエー走るバスはるかむかうに
白き船ゆく
小雨降る浦富湾の展望台地球は丸いをつくづくな
がめぬ

わが里

安西 苑

満満と水を張りたる広き田に家並み映りて揺らめ
くがにあり
野辺を吹く夕風ありて身をおけば昼の暑さも遠の
きゆくか
闇迫り人語も絶えたる水の辺に無数に飛び交ふ螢
の光よ

紫陽花

横林 富砂子

紫陽花の薄くれなゐの花まりよしばし佇み話しか
けみる
水やりてやうやく実りし茄子なり「ありがとさん」
とそつと撫でみる
大豆蒔くも秋の収穫如何ならむ鹿に勝ち抜く智恵
あれこれと

明るい人生に

鳥形 節子

五月晴天まであがれたくましく未来をはばたけ鯉
のぼりだよ
曾孫のよちよち歩きのかはゆさに眉上げ笑ふか家
族のきづな
成人式の祝ひの振袖着し孫よわれの願ひは明るい
人生に

能登香温泉

藤本 伸子

華やかに儂く消えるか夏の夜の光と音と人との饗
宴
温泉の掃除を終へし遅き夜を螢乱舞す梅雨の最中
に
仕事終へのんびり浸る能登香の湯四肢健在にして
湧き来る意欲

子供の声

森本 久子

表に出で自転車の子供の声聞けば楽しかりけり老
にも笑みあり
たまもの今日ある命老いの道励まし呉るるは命
の重さ
まるまると月の昇りし能登香山優しき風に青葉が
そよぐ

笹百合

山下 三代子

栗山に咲きぬし笹百合幾本を部屋にさしをりその香を楽しむ
陽光とそよ風に揺るる青田なり今年も難なく豊作なれかし
道の辺の薄紅の梅の花芳香放ちて重なり合ひて

折にふれ

杉本 幸子(土居)

笹舟を競いて流し歓声をあげたる児らもはや中学生
白南天軸だけ残し鶴に今年もきれいに食べられており
夕闇にほんのり白きくちなしの甘き匂いの流れいる路

微笑み

井口 秀子

ほほゑみの花咲く丘に幼らと土筆つみつつ歌ふ幸せ
紫陽花に降る五月雨は乳ならん色鮮やかに微笑みて咲く
人生の幸せ問はば湯に入りてああー極樂と言へる瞬間



日本画 鶴石早苗

幼児

新井 和代

幼児はめめが痛いと臉押へコンタクトレンズ外すまねする
猿するよと幼は机にぶら下り赤い顔して拍手を求め
ばあちゃんは乳出ないのと問ふ幼まん丸い目をしてわれを見詰めて

孫

船曳 文子

スペインへ嫁ぎし孫の里帰り幸せの証よふくよかなる頬
「よき妻です」真顔で語るバプロ君日本語は妻に教はりしまま
日本語をすらすら話すバプロ君沢山練習したと得意げに言ふ

秋はそこから

福島 美智子

稲刈れば赤とんぼの群れ押し寄せて秋はそこから立ち上りゆく
手に載せて木綿豆腐を采の目に切れば冷たし初秋の朝
窓際でとろりと眠る飼ひ猫を忍び寄り来て木の影が抱く

若葉

角南 三津糸

「青春」となりきつてゐる柿若葉燃ゆるが如く照り輝きて
吸ひ上げて愁ひも不安も吐くごとく楠の若葉は青空に萌ゆ
植ゑ終えし棚田に映る山の影かすかに揺らして囁く早苗

明日を祈りて

新免初子

明日あるを祈りて明り消す部屋を救急車の音けた
たましく過ぐ
飲み下す未明のお茶の冷たさに夢たぐり寄せたぐ
り寄せむか
脱衣所に脱げば音するころび行く大豆作業の終り
し夕を

梅雨

加藤保子

梅雨に入り雨の続きて庭の草畑の草も見るみるの
びる
束の間に柘榴の丸実つやつやとなりて小さく梅雨
の雨の中
陽のひかりまぶしく差せる梅雨晴間野いちご赤き
実をかがやかす

青い空見る

北村和子

湯船にてふんはり思ふは足の指手の指五本つきあ
る不可思議
知らぬ事知らされぬ事多多あれど知らぬも楽し知
らぬが仏
何も彼も厭になる日は青色のセーターを着て青い
空を見る

老の一齣

黒石貞子

いつしらに後手組みて歩みある我とはなりて戸が
映し出す
柿の枝に二羽の鴉が落花生植ゑをる我に思案顔な
り
「ブロック」に足をかけんと思うたら蜥蜴がのん
びり日向ほこする

うららの光

長澤和枝

トマト茄子の定植位置を打ちやれば蚯蚓くにやく
にやうらの光
朝の陽のすべるがにさす早苗田に光ゆらゆらと早
苗もゆるる
降りしきる雪を呑みては吉野川銀に光りて冷えび
え流る

男の孫

森本かよ子

目高すくひの孫見守りて腰おろす川辺の石は温か
かりし
大阪へ後数日にて男の孫は旅立たんとす生れしわ
が家を
大阪の空に向ひて語りかく「辛くはないね男の子
だもん」

をりをりに

中川富美枝

陣太鼓の音色遠くに聞くがにも赤穂の城趾ゆつく
り歩む
炎とも燃ゆる晶子のその血潮伝ひて来ぬか碑なぞ
れば
古りて良し新しきも好しそれぞれの雛を愛でつつ
雪の勝山

今宵暮れゆく

末宗千歳

大根の種を播きゐて鶯のソプラノの声も混ぜて播
きゆく
ままごとの如き農なるもたくればどつとつかれが
吾を襲ひくる
白じろと咲きつくそばは減反の峽をうづめて今宵
も暮れゆく

里の命

江見 眞智子

釣糸のめぐりを走る水馬鯉も鮒をも足裏にをさめ
発酵を繰り返しつつピオーネのワインはほのかに
香りを増し来ぬ
翁さぶる鼻一羽が裏山を占めゐて鴉が遠まきに鳴
く

テレビに遊ぶ

徳野 富美子

昼下がり見てをるドラマの台詞をば日記に残す
「死ぬほど愛す」と
家事をなす時が欲しくて吾子達を遊ばせしテレビ
に今わが遊ぶ
意味も無く書きゐる落書き残しおき死なばと思へ
ばをかしさこみあく

きつと間にあふ

日下 智加枝

指先の器用不器用言ひながら未知数なる子の居る
明るさや
あの人もこの人も薬をとり出して六十になる女の
重さ
雨後の川原に土筆が湧くごとく萌え出で今ならき
つと間にあふ

生きる

入矢 敏江

逆光に海光るなりこの人でなくてはならぬと決め
し日ありき
恰好良さの基準は何ぞ諦めず五十七歳じたばた生
きる
もの言はず家を出て来てこのまんま行方知れずと
なりたき秋空

揖保川の源流

浜田 くに子

揖保川の源流見むとてふる里の細き谷川辿り行く
なり
栄えにし鉦山跡地も揖保川の源流も包みて若葉若
葉よ
鉦山の跡地に並ぶ無縁仏に山芍薬が白く咲いてゐ
る

ふるさと

三浦 智江子

幼き日大きな川と思ひぬしに落合橋には電灯三つ
大川にだいたい色が滲みをり電灯三つ映りてゆる
る
暗き部屋に「こはいこはい」と走り込み走り出で
ては兎らが遊ぶも

能登香山

関内 惇

玉の緒の苦しく経りつつ紐鏡能登香の山の裡解け
ぬまま
ふくふくと雪を被ける能登香山紐も裡をも解かむ
とするや
紐鏡能登香の山の雑木木の木末こぬれうるうる陽にゆる
びつつ



作東文化協会 グループ紹介

	団体名	種別	代表者名	指導者名	例会	会員数
1	白雲書道会	書道	北村福作	里見明	月2回	28 ^人
2	阿部書道会	書道	山本章	阿部雲魚	月2回	8
3	作東水彩画教室	水彩画	田中佳栄子	竹中信清	月1回	17
4	作東油彩教室	油彩画	末宗一之	竹中信清	月2回	20
5	さつき会	日本画	寺師喜代美	井上美智江	月2回	10
6	ちぎり絵 がんびの会	ちぎり絵	名部竹夫	名部竹夫	年8回	35
7	墨絵教室	墨絵	小林艶子	岩本敏子	月2回	8
8	ちぎり絵教室(江見)	ちぎり絵	大崎安江	杉本幸子	月1回	7
9	ちぎり絵教室(福山)	ちぎり絵	青山美和子	杉本幸子	月1回	6
10	園芸部(山野草)	山野草	小坂田文		年13回	18
11	園芸部(盆栽)	盆栽	青山巖		年8回	10
12	ひまわりの会	華道	杉本幸子	長家清甫	月2回	17
13	長家社中	華道	谷本津多江	長家清子	月3回	10
14	お花を楽しむ会	華道	香山秀子	杉本幸子	月1回	9
15	英北短歌会	短歌	横山猛	関内惇	月1回	23
16	能登香短歌会	短歌	名部みどり	関内惇	月1回	18
17	吉野短歌会	短歌	横山美恵子	関内惇	月1回	13
18	山家川俳句会	俳句	山本登	小島宇人	月1回	14
19	作東川柳同好会	川柳	山本章	岡田千茶	年10回	13
20	彩の会	絵手紙	木南節子		月1回	8
21	絵手紙教室	絵手紙	谷口翠	岩本敏子	月1回	11
22	吉野ハピネス	絵手紙	横山富姫	竹内まり子	月1回	7
23	L a b o	英会話	原田順子	須田郁子	月4回	9

	団体名	種別	代表者名	指導者名	例会	会員数
24	歴史地名研究会	地名研究	新田祐之	小林礼三郎他	月1回	20 ^人
25	古文書を読む会I	古文書	山本章	安東靖雄	月1回	20
26	古文書を読む会II	古文書	山本進一郎	安東靖雄	月1回	10
27	写真同好会写友	写真	小坂田貢	小玉司	年8回	15
28	吉野ハピネス	大正琴	小林範子	富永仁美	月2回	13
29	粟井春日歌舞伎保存会	歌舞伎	安東正		年12回	20
30	宮原獅子舞保存会	獅子舞	渡辺博		年20回	30
31	あずさの会	大正琴	岩本敏子	藤谷守	月1回	8
32	作東友久琴楽会	大正琴	岩本敏子	中野景友	月2回	28
33	早渕流剣詩舞道	剣舞 舞	石川八千代	安原鯉舟	月8回	13
34	作東吟詠愛好会	吟詠	光辻猛美	衣井義文 旗口敏磨	月2回	42
35	コール作東	コーラス	山本文子	池田直美	年28回	26
36	舞踊の会	舞踊	井上美智子		月3回	8
37	作東囲碁クラブ	囲碁	横山廣志		月2回	30
38	お達者 ねっと倶楽部	インターネット	鳥形初美		月4回	8
39	フラワー工房JUN 押花教室	押花	山本淳子	山本淳子	月1回	8
40	押絵・ちぎり絵 むつまじい会	押絵 ちぎり絵	小林艶子		月2回	8
41	フラワー工房JUN 山の幸染め教室	染物	山本淳子	山本淳子	月1回	9
42	編み物手芸教室	編み物手芸	妹尾さと子	妹尾さと子	月4回	12
43	おきな草	機織	小坂田尚子	福原朱美	年8回	11
44	ビーズを楽しむ会	手芸	妹尾さと子	西坂暁子	月1回	10

平成18年度 作東文化協会事業報告

【全体事業】

年	月	日	事業名	内 容
18	3	26	総会	バレンタインプラザ
	4	27	第1回理事会	事業計画・「作東の文化」発刊・会員募集について
	5	16	専門部役員会	専門部事業計画・予算配分について
	5	16	第1回編集委員会	編集委員長選任・編集方針について 以降4回開催
	7	4	第2回理事会	研修旅行・文化誌原稿募集・文化展について
	7	23	研修旅行	香川県・東山魁夷せとうち美術館他
	9	12	第3回理事会	文化展について
	10	15	文化誌32号発刊	全会員に配付
	10	28	文化展	海洋センター 29日まで
19	1	16	第4回理事会	春の書画写真展について
	3	13	第5回理事会	総会について
	3	24	春の書画写真展	環境改善センター 25日まで

【各専門部・支部活動】

年	月	日	部 名	内 容
18	4	16	棋道部	第99回双山囲碁大会 ～101回まで
	4	18	園芸部	里山花めぐりと山野草の育て方講習/都市との交流会 きんちやい館
	4	20	押花絵	押花合同作品展(おかやまファーマーズ) ～22日
	5	3	絵画部(洋画部)	春の絵画展 バレンタインプラザ ～6日
	5	1	写真部	撮影会 ～30日
	5	12	福山支部	役員会
	5	16	江見支部・豊野支部	合同評議員会
	6	3	粟井支部	総会
	6	7	土居支部	総会
	6	12	吉野支部	評議員会
	6	24	芸能部	役員会 以降7/21・12/7・2/6開催
	8	1	写真部	作品展 バレンタインプラザ東側 ～30日/9月 生涯学習展示参加 プラザ
	8	22	粟井支部	双山囲碁クラブ100回記念大会
	8	30	押花絵	国際ボランティア押花体験教室
	9	1	華道部	ミニ花展 美術館 ～3日
	9	1	書道部	白雲書道展 美術館特別展示室 ～3日
	10	8	茶華道部(茶道)	お月見茶会 作東公民館
	10	8	粟井支部	春日歌舞伎公演
	10	14	園芸部	自然にやさしい鉢づくり講習会 きんちやい館
	10	22	粟井支部	研修旅行
	10	28	絵画部(洋画部)	兵庫作東交流展 美術館 ～11月4日
	10	28	園芸部(盆栽)	盆栽展 美術館 ～11月4日
	10	28	押花絵	美術館特別展示室展示 ～11月3日
	11	11	園芸部	灯りと山野草展 きんちやい館
	11	12	江見・豊野支部	合同研修旅行
	11	15	粟井支部	役員会 以降2月開催
	11	16	写真部	兵庫県佐用郡展出品
	11	25	吉野支部	研修旅行(福山方面)
19	2	10	吉野支部	「自慢の作品展」(高齢者対象) 吉野きんちやい館
	3	25	芸能部	文化発表会
通年事業			書道部	教室/毎月2回 作東公民館/毎月3回 里見明氏宅
			絵画部(日本画)	作品制作/作東公民館 毎月第2・4木曜日午前9:00～12:00
			絵画部(洋画部)	絵画教室/環境改善センター 第1・3土曜日午後1:00～5:00
			茶華道部(華道)	教室/作東公民館 毎月第1、第3土曜日/公民館に毎月展示
			茶華道部(茶道)	教室/作東公民館 毎月第2、第4土曜日
			文芸部	川柳同好会 奇数月最終水曜日例会 午後2:00～/短歌の会 4教室各月1回
			園芸部	毎月第2土曜日 午前8:00～11:00 山野草の寄せ植え、育て方相談 指導 きんちやい館
			歴史部(古文書の会)	毎月第3金曜日 午後1:30～ 初心者講座 午前9:30～
			歴史部(地名研究会)	地名研修会(4・6・7・8・11・12・2・3月)
			手芸部	毎週月曜日 作東公民館・旧船曳医院 毎月第2水曜日ピアース教室 囲碁教室 作東公民館 毎週土曜日/粟井教育集会所 毎週月曜日
			棋道部	環境改善センター 毎週水曜日
			情報映像部	部会/第3木曜日13:00～ パソコンサークル/毎週水曜日19:00～/文化協会HP更新
			粟井支部	教室/太極拳・パソコン・囲碁・ちぎり絵・押花・カラオケ・フルート・大正琴・そろばん・書道・詩吟・少林寺・舞踊・鼓太鼓 愛寿大学趣味の講座:書道、短歌、手芸
		各専門部	プラザ・美術館展示:絵画、書道、写真、押花絵、ちぎり絵、短歌	

編集後記

書店の棚には、あさのあつこさんの作品がずらりと並んでいます。しかし全くオリジナルな、どこへ行っても見ることでできないあさのさんの文章がこの「作東の文化」に掲載されました。

編集子にとってこの上ない喜びを味わうことのできた本号です。日本一多忙なあさのさんであるだけに感謝感謝です。

本年四月から市の教育委員会が作東総合支所に移転して来ました。担当職員の資質もあるのでしょうが、本協会の事務局として誠心誠意の対応をしてくださっています。これまた感謝感謝です。

周辺の好意に甘えるだけでなく、我々自身がその好意に報わねばと思っています。

編集委員会



書道 池田みつ

作 東 の 文 化 第 33 号

平成19年10月15日発行

- 編 集 作東文化協会文化誌編集委員会
(美作市教育委員会 社会教育課内)
- 編集委員 谷口 重人 青山 時弘 安東 靖雄
梅澤 紀之 小坂田 貢 新田 祐之
原 洋一
- 発行所 作 東 文 化 協 会
岡山県美作市教育委員会 社会教育課内
TEL (0868) 72-2900 〒709-4292
HPアドレス <http://bunka.boj.jp/>
- 印刷所 株式会社 廣 陽 本 社
岡山県津山市田町22